

U1章 形容詞の基本

日本語の形容詞の基本について次の順序で説明します。

U1.1 い形容詞 (2)

い形容詞の基本について説明します。

U1.2 形容詞の「基」 (5)

「形容基」と「いです基」について説明します。

U1.3 古語と現代語の形容詞 (6)

古語・現代語の異同と、古語の活用について説明します。

語幹の扱いを正せば、ク活用とシク活用の区別は不要です。

U1.1 い形容詞

本文法で「形容詞」とよぶのは「い形容詞」のほうです。 8章

形容詞は一般に人や物の性質，形状，状態などを表しますが，日本語には2種類の形容詞があります。「い形容詞」と「な形容詞(形容動詞)」です。

い形容詞，な形容詞

い形容詞……「い形容詞」は「楽しい曲」「明るい部屋」などのように，名詞を修飾するときに「い」の形になり，言い切りでも「い」の形になります。
新しい「い形容詞」はほとんど作られませんが，「ナウい」「ださい」などは作られています。

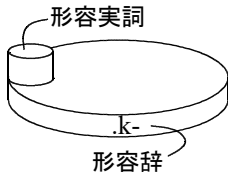
な形容詞……「な形容詞」は「軽快な曲」「静かな部屋」などのように，名詞を修飾するときに「な」の形になり，言い切りでは「だ」の形になります。
「キャッチーな」のように比較的自由に作られます。

い形容詞のモデル

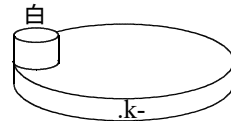
い形容詞は**形容実詞(形容実体)**と**形容辞**の融合したものです。

い形容詞 = 形容実詞 . 形容辞-


例: 白い = siro . k-




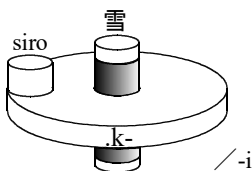
図U1-1 い形容詞のモデル



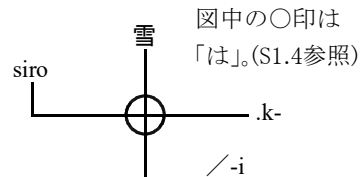
図U1-2 「白い」のモデル

形容辞の .k- は発音されるときと，されないときがあります(本書p.4参照)。発音されない .k- は  のように表示します。

「雪の1は白い siro  i」という判断は下図のような構造を持っています。「-i」は「(基本)描写詞」です。



図U1-3 雪の1は白い



図U1-4 雪の1は白い (簡略モデル)

な形容詞のモデル

11章, 19章注1(p.177)

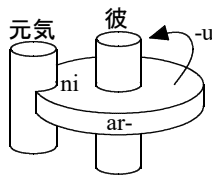
な形容詞は様態等を表す実体(名詞)が動詞 ar- の ni 格, de 格に立ったものです。

な形容詞 = 実詞-ni=ar-u / 実詞-de=ar-u

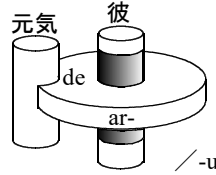
例: 元気な = 元気-ni=ar-u / 元気だ = 元気-de=ar-u

ただし, □ の部分は発音されません。

元気な = 元気-ni-□=ar-u / 元気だ = 元気-de-□=ar-u

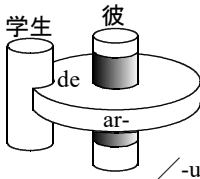


元気な彼
図U1-5 元気-ni-□=ar-u 彼

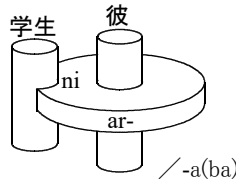


彼の1は元気だ
図U1-6 彼の1は元気-de-□=ar-u

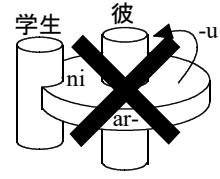
ここにある構造 -ni=ar- / -de=ar- は「断定基」となっていて, 下の左図のように一般の名詞(実体)にも使用されます。



図U1-7 彼の1は学生である



図U1-8 学生ならば



図U1-9 *学生な彼

一般の名詞が ni 格に立つ場合, 「な」で読めるのは「ならくば」(中央図)や, 「なので」のときだけで, 一般の名詞を「な」で修飾することはありません(右図)。

「な形容詞」は様態等を表す名詞が「断定基」に立ったもの

名詞が動詞 ar- の ni 格, de 格に立って断定を表すものを「断定基」とよびますが, 断定基の使用において「な形容詞」は一般の名詞とただ1つしか違いがありません。それは上の図U1-5 のように「な」の形で修飾することができることです。

「な形容詞」は様態等を表す名詞が断定基を使用したものなので, 本書では特に扱いません。『日本語のしくみ(1)』 p.33 の「断定基の活用表」をご覧ください。ただし, 便利なので, 「な形容詞」という用語を使うこともあります。

本文法で「形容詞」とよぶのは「い形容詞」のほう

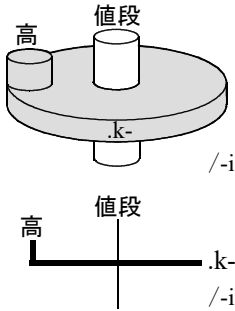
問U1-1 この文法では「赤い」「赤く」をどう形態素表記(ローマ字表記)しますか。

問U1-2 「彼は元気である」と「彼は学生である」の異同について述べてください。

形容辞 .k- の発音の有無

k は k が発音されないことを表します。

8.3



★現代語では -i が続くときは k は発音されません。

taka**k**-i (たかい)

★ u, a, e が続くときは k は発音されます。

taka**k**-u (たかく)

taka**k**-Ø=ar-i=t-Ø=a-Ø (たかかった)

taka**k**-creba (たかければ)

★「-u ございます」が続くときは k は発音されません。

taka**k**-u ございます (たかう ございます)
(たこう ございます)

図U1-10 値段-ga 高 **k**-i

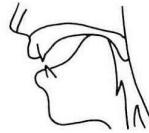
(S1.2 再記述)

※上図のように融合部を塗りつぶして一体性を明瞭に示すこともあります。

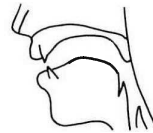
k の省略

A3⑦

形容辞 .k- の発音とその省略は右図のとおりです。



図U1-11 k の発音



図U1-12 k の省略

形容辞 .k-

7.2, 8.3

「辞」は形態素なので「詞」ですが、これだけでは存在せず、必ず詞と融合して新たな詞を形成します。形容辞と動辞があります。

形容辞(.k-)……… 形容詞を構成 aka.k- (赤い), tika.k- (近い), naga.k- (長い)

動辞(.r-/mek-等)…動詞を構成 kumo.r- (曇る), haru.mek- (春めく)

形容辞には .k- と .s- がありましたが、鎌倉時代に .k- に統一されました。

手

5.1注1

「融合」することを表す「.」を「融合手」とよびます。「手」には4種類あります。

融合手「.」 詞と辞を結びつけます。hoso.k- (細い), riki.m- (力む)

結合手「-」 詞と詞を結びつけます。ooki.k-u (大きく), umi-ni (海に)

併合手「=」 語と詞を結びつけます。odor-i=kata- (踊り方), yom-i=mono- (読み物)

複合手「+」 構造上の実詞どうしを結びつけます(第4修飾)。to+zan- (登山)

問U1-3 「咲きて」「焚(た)き松」「月立ち」の k を発音しないとどうなりますか。

問U1-4 「高き山」「高い山」の違いについて説明してください。

問U1-5 「若い」を過去や、丁寧(「です」)の形にすると、構造はどうなりますか。

U1.2 形容詞の「基」

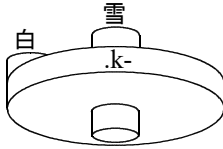
「基」についてはS1.7を参照してください

8.5, 8.6

(1) 形容基

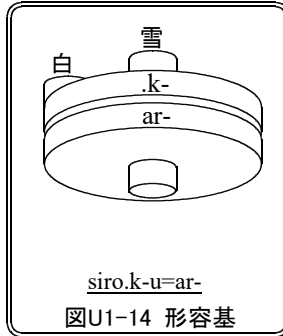
形容基は「xxx.k-u=ar-」(存在動詞)の形をしています。

「白かった」のように形容詞を過去にする場合は、形容属性(siro.k-)に動属性 ar-を加えた形容基(siro.k-u=ar-)にしてから、「た(t-Ø=a(r)-Ø)」(S1.9参照)を加えます。



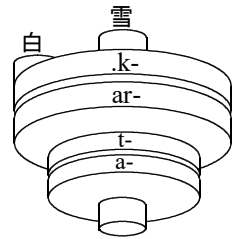
siro.k-

図U1-13 形容詞



siro.k-u=ar-

図U1-14 形容基



siro.k-u=ar-i=t-Ø=a(r)-Ø

図U1-15 白かった

形容基は「白かろう siro.k-u=ar-oo」「白かったら(ば) siro.k-u=ar-i=t-Ø=ar-a(ba)」なども形成します。(=ar-i=t-Ø=ar- の下線部は =at-Ø=t-Ø=ar- のように音便化。)

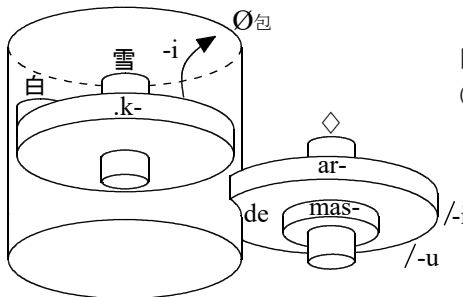
(2) いです基

形容詞を丁寧にするときにこの基を使います。

形容詞を丁寧な形にしようとするときは、「白いです」のように「です」を使います。この、次の形式をもっている「いです」を「形容詞丁寧化基」とよびます。

-i=Ø包-de=ar-i=mas- (例: shiro.k-i=Ø包-de=ar-i=mas-) (白であります)

-i=Ø包-de=Ø-Ø= s- (例: shiro.k-i=Ø包-de=Ø-Ø= s-) (白いです)



図U1-16 白いです (いです基)

図中の「◇」は主体が不明(状況?)であることを示しています。(S1.10参照)

「白かったです」では、「た」が動詞(ar-)使用なので「うです基」になります。

shiro.k-u=ar-i=t-Ø=a-Øu=Ø包-de=Ø-Ø= s- 下線部が「うです基」

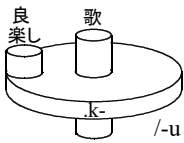
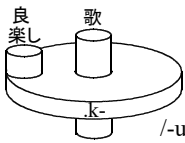
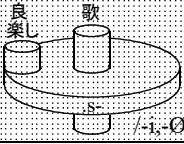
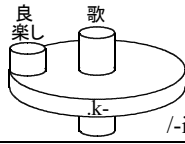
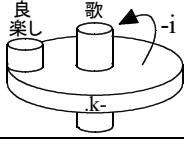
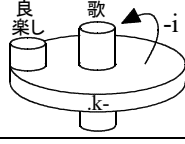
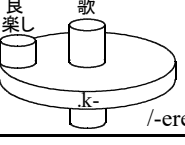
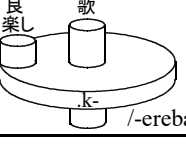
U1.3 古語と現代語の形容詞

便宜上「連体形」「終止形」などの用語を使います。

古語では終止形が .s-i

古語の終止形は .s-i です。□内は発音しません。

表U1-1 古語と現代語の形容詞 (かな表記は国文法, ローマ字表記は本文法)

古語 (ク・シク活用)(平安時代)		現代語	
連用形	良-く yo.k-u 楽-しく tanosi.k-u 	連用形	良-く yo.k-u 楽-しく tanosi.k-u 
終止形	良-し yo.s-i 楽-し tanosi.s-i 	終止形	良-い yo.k-i 楽-しい tanosi.k-i 
連体形	良-き yo.k-i 楽-しき tanosi.k-i 	連体形	良-い yo.k-i 楽-しい tanosi.k-i 
已然形	良-けれ yo.k-ere 楽-しけれ tanosi.k-ere 	假定形	良-けれ yo.k-ereba 楽-しけれ tanosi.k-ereba 

- ★ 古語では終止形の形容辞は .k- ではなく .s- でした。(上表 古語の終止形)
- ★ それで、古語終止形は「良し yo.s-i」のように「…し」でした。現代語の終止形は「良い yo.k-i」のように「…い」で、k が発音されません。(破裂の省力です。)
- ★ 終止形時の形容辞 .s- は鎌倉時代に .k- に統一されました。
- ★ 語幹の扱いを正せば、ク活用、シク活用の区別は不要となります。

表U1-2 ク・シク活用の表 (かな表記は国文法, ローマ字表記は本文法)

活用	形容詞	語幹	連用形	終止形	連体形	已然形
ク活用	良し yo.s-i	よ yo.k-	く -u	し (yo.s)-i	き -i	けれ -ere
シク活用	楽し <small>省略</small> tanosi.s-i	たの tanosi.k-	しく -u	し <small>省略</small> (tanosi.s)-i	しき -i	しけれ -ere

- ★ 終止形では形容実詞が si で終わる場合(tanosi.s-i),重複回避のため後ろの.s-i が省略されたので、活用を区別して捉えることになってしまいました。

古語の「カリ活用」

便宜的に「未然形」等の用語を使います。

形容詞の補助として形容基(xxx.ku=ar-)が次表のように使用されました。

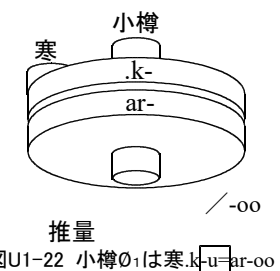
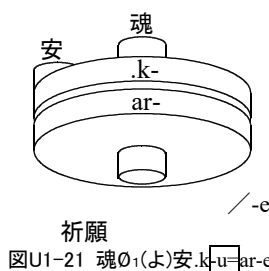
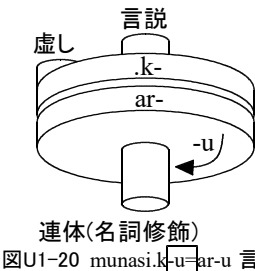
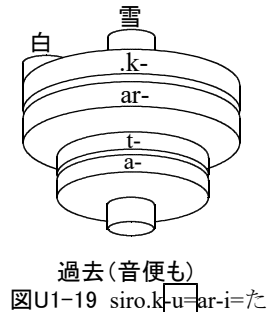
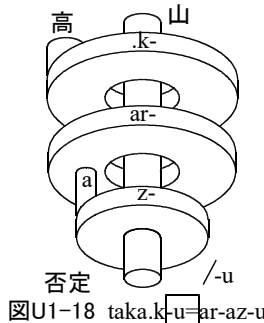
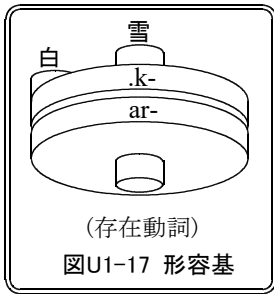
表U1-3 カリ活用の表 (かな表記は国文法, ローマ字表記は本文法の分析)

活用種類	形容詞	カリ活用語幹	未然形	連用形	連体形	命令形
ク活用	高し taka.s-i	たか taka.k <u>u</u> =ar-	から -az-u	かり -i	かる -u	かれ -e
シク活用	悲し kanasi. <u>s-i</u>	かな kanasi.k <u>u</u> =ar-	しから -az-u	しかり -i	しかる -u	しかれ -e

※国語学でのカリ活用は、本文法では ar-のついた形容基の活用です。
 ※カリ活用の終止形・已然形は前ページの活用形を使います。ただし、
 ※カリ活用で終止形・已然形を使う語はほぼ「多し」のみ(多かり, 多かれ)。

- ★ u の部分は発音しません。
- ★ 国文法で語幹の扱いを正せば、ク活用・シク活用の区別は不要となります。
- ★ kanasi.s-i (悲しし) を、「悲しし」と発音せず「悲し」と発音するのは、「し」の重複回避, 省力のためです。(終止形の.s- は鎌倉時代に.k- に統一されました。)

このカリ活用では形容基が用いられていますので、基の中の動詞 ar- により、形容詞は存在動詞になっています。 8.5



図U1-20 munasi.ku=ar-u 言説 図U1-21 魂の(よ)安.ku=ar-e 図U1-22 小樽の(は)寒.ku=ar-oo

問U1-6 「ない」「恋しい」の古語と現代語の違いは何ですか。(本書p.6の表参照)

問U1-7 「シク活用」の「語幹の扱いを正す」とはどういうことですか。

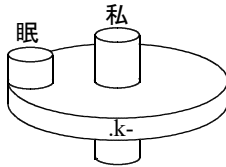
感情形容詞と属性形容詞

形容詞を「感情形容詞」と「属性形容詞」に分けることがあります。

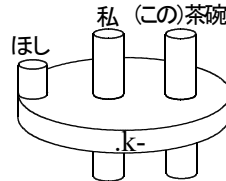
[感情形容詞]

- (1) あーあ、眠い。
 (2) この茶碗がほしい。

と言うときには、まさに話者その人が「眠い」「ほしい」と感じているということが聞き手に伝わります。主語は発話者であることが明白なので、ふつう省略します。このような形容詞を「感情形容詞」とよんでいます。(主語を一人称以外にするときは、「彼は眠そうだ。」「彼女はこの茶碗がほしいらしい。」などのようにします。)



図U1-1 (私は)眠い



図U1-2 (私は)この茶碗がほしい

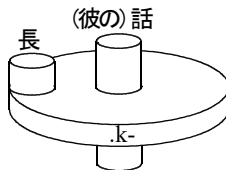
「感情形容詞」が複主語で使用される場合については本書p.47をご参照ください。ちなみにいえば、「好きだ・嫌いだ」はナ形容詞で、イ形容詞ではありませんが、発話者以外にも主語になりますので、属性形容詞の性質も持った感情形容詞です。

- (3) 私はうどんが好きだ／嫌いだ。
 (4) 彼はうどんが好きだ／嫌いだ。

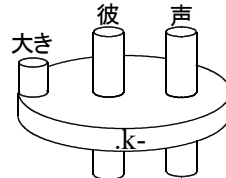
[属性形容詞]

- (5) 長いなあ。(「何が?」と問いたくなります。)
 (6) 彼は声が大きい。

と言うときには、何かの属性について話者がそう判断していることが伝わります。主語は発話者とは限りません。このような形容詞を「属性形容詞」とよびます。



図U1-3 (彼の話は)長い



図U1-4 彼は声が大きい

◎「おもしろい」のように両方の形容詞として使用される形容詞も多いです。

[属性形容詞] この本、おもしろい? [感情形容詞] うん、ぼくはおもしろい。